

# 三味線方

# 若野

Ryuji WAKANO

# 龍司

(杵屋柳三郎)



※あわよかれん：意味…稽古事で目的がなく、あわよくば師匠をものにしようと、我こそはと稽古場に通うれんちゅうのことをいう。「大阪ことば辞典」より

不時の交通事故で腰部骨折麻痺で車椅子生活を余儀なくされた境遇の中で、残された身体の機能を活かし三味線一棹を生きる道具として様々な活動が続ける一人の三味線方若野龍司さん。「大阪狭山に生きる人」はこの人です。

若野龍司さんは昭和36年6月3日大阪市住吉に生まれました。両親は青果商を営み忙しかったので、子どもの頃はほとんど祖父・若野卯三郎さんの膝の上。卯三郎さんは長唄三味線が大好きで、自称「あわよかれん」。龍司さんを膝の上に乗せ毎日三味線を弾いていたとのこと。そのお陰で龍司さん小学3年生の頃にはもう独りでも三味線を弾けるようになっていたそうです。時が過ぎ12才になった頃、祖父の卯三郎さんは老いの為もう三味線が弾けなくなりました。そして「おじいさんの三味線」は龍司さんのモノとなりました。昭和48年世の中は大阪千日前デパートの火事で大騒ぎでした。さて三味線をわがモノとした龍司さんは、誰かお師匠さんを探しました。その頃大阪と四国で教室を開き、意欲のある者には謝礼の多小にもかわらず熱心に教えられるという杵屋柳翁師のことを知り、早速入門を請うのですが、

先ず中学校を卒業し、高校に入学することを条件とされ、しばし勉強に励み、やがて中学を卒業、大阪工業大学高等学校電機科を受験し合格。やっと杵屋柳翁師門下となります。しかしその当時は三味線で身を立てることなど毛頭も無く、卒業したら町の電気屋さんになりたいと思っていました。理由は偶々家に来た電気屋さんの適切な工事処理に感動したからだそうです。ステレオオーディオ機器に夢中になっていました。

務が多かったため、昼は三味線の稽古をし、夜は仕事場に行く毎日でしたが、国鉄のJR化でリストラに遭い、印刷のGTO技術の資格を取り、印刷会社で働く事になりました。時代は昭和から平成に変わり、平成5年の春、三味線の修行が実を結び、師匠の杵屋柳翁から杵屋柳三郎の名を与えられ、晴れて三味線方として認められました。

後に大きなショックを受け、道路に放り出され気を失いました。…：運転を過まったら車に撥ねられるという思わぬ事故に会ってしまったのです。平成5年6月23日の夕方のことでした。第4第5腰椎の骨が砕け、骨が背中に突き出し、下半身麻痺という最悪の状態になってしまったのです。さらに追いつきをかけるように、その秋10月、師匠の杵屋柳翁さんが亡くなってしまいました…。

台で踊りの花柳紫之丞さんと出会いは平成8年「みおつくし会」を結成。鳴り物師の望月太八紀さんと共に毎年邦楽邦舞の会を開き、演奏活動を楽しみ、一方、南河内郡河南町で障がい者の音楽活動を推進する「フェスタきねづか」にも参加、福祉ボランティアにも力を入れています。

大阪狭山では大阪狭山市文化協会や邦楽邦舞鑑賞会のメンバーの人達と今までに「狭山池大蛇物語」を制作し、現在は落語「あたま山」を素材にし、狭山池を取り込んだ邦楽邦舞おもしろ舞台を作り、連作ものとして大阪狭山の名物にしたいというのが夢だそうです。

「今まで自分の身に起きた事は自分の意志でなく、他からの力が働いてなったことだけれど、それを言っても始まらない。残されたもので生きるしかないのです、それをしっかりとやっている」と語る若野龍司さんに、全てを受けとめ自然体で生きる人間の強さをずっと感じさせられました。



そして治療を続けるが日々悪化し「時はどう生きようかと心の葛藤の中、平成8年にこの治療で世界的に有名な水無瀬病院で椎間板減圧術の手術を受けて、徐々に感覚が戻り始めました。更にリハビリを続け、ようやく正座の出来る状態を得て精神的にも落ち着き、これなら三味線が弾ける、例え車椅子であっても生きていけると心を決め、三味線教室を開き、邦楽の仲間との共演のコンサートにも出演する等、活動の場を広げてゆくのですが、そんな舞



台で踊りの花柳紫之丞さんと出会いは平成8年「みおつくし会」を結成。鳴り物師の望月太八紀さんと共に毎年邦楽邦舞の会を開き、演奏活動を楽しみ、一方、南河内郡河南町で障がい者の音楽活動を推進する「フェスタきねづか」にも参加、福祉ボランティアにも力を入れています。



みおつくし会の舞台